

二度目の京都行きをした。二月二十三日午後、五月開催の京都文化博物館での個展の打ち合わせの会が持たれた。場所は京都外国語大学の学長室。森田嘉一学長、京都メキシコ文化協会の役員の方々三名。これが終わったあと、両親の墓参、そして帰宅。兄の家で表装屋さんに来てもらい仮枠仕立ての額表装を五点たのむ。これは旧作だが、今回の文化博物館の会場が特に広く小さいものでは場もたない。急遽畳二枚三枚大の大作を出品しようということになった。大きいものを、ゆったりとした会場で見てもらいたいと思う。

夕方、兄の家を辞して新幹線で京都から笠岡へむかう。折から同市の竹喬美術館で開かれている友人の画家、藤川汎正（ぼんせい）氏の展覧会を見に行くためである。福山で下車、在来線に乗りかえて、笠岡下車、もうとっぴりと日が暮れて暗く、笠岡に着いたことには着いたが、さてどうしよう、どこに泊まったらいいのだろうか。駅の改札をでたところで案内所できいてみた。近くに昔ながらの旅館があるからそこがよかろう、歩いて一、二分のところだと教えてくれたのでそうすることにした。駅前通りの小さな旅館だった。泊り客は誰もいなかった。一泊五千円、食事、夜、朝つけて七千円ぐらい。部屋は六畳、ふとんはそのまま敷ばなしだった。気楽でよい。夕方のカレーライスを食べてすぐねむりについた。

朝起きてみて、この笠岡で汎正が生まれ育ったところだと思うと感慨ひとしおだった。朝食をおいしく食べて八時には旅館を出た。およその見当をつけて町の様子など見ながらぶらぶら歩いた。鉄道も昔ながらのものだ。古い。かつての山陽本線である。どうも海に近いらしい。埋め立て地とある標識も目についた。くずれかかった民家、土蔵などが軒を並べている。歴史を感じさせる。

やがて歩いて竹喬美術館の前に出た。総タイルばりの西洋館、みるからに風格がある。まだ開館まで時間があるので入り口の横あたりでブラブラしていると、そこへひとりの男性が見えた。直観でこの副館長の上園さんだとわかった。前もって汎正からきょう訪問のこと聞いておられたらしい。さっそく中へ通されて、歓談した。竹喬美術館はまことにすばらしく、美術館と呼ばれるにふさわしい。

陳列作品は約百二十点、これらの作品群は岡山の建築業の荒木さんコレクションのもの、今回これらがみなこの笠岡竹喬美術館に寄贈されるのを機に、展覧会の運びとなった。荒木さんは今までの汎正の生活費の援助をされてきて、少しずつ汎正から作品が送られていた。「神話を旅する」が今回のテーマ。

汎正は一途に自分の仕事に賭けてきた。職人的なところもある。主に小品の版画、デッサン、ガラス絵、水彩画、それにこの展覧会のために描いた油彩の百号もあった。

コツコツ描いてきたこれらの作品がみごとに竹喬美術館の壁面に飾られて作品がよみがえった。じっくりと一点一点の作品を見せてもらった。見る人に語りかけてくる。多少難解な絵もあるが、そんなのは問題ではない。汎正の面目躍如、これぞ真の画家といえる。ちょこちょこ描いた軽薄な絵ではない。血のにじむ思さえる。じっくり何十年も仕事をしてきた。生活は決して楽ではなかった筈だ。早朝の新聞配達もある時期にやったと聞いた。

三十年の知己、藤川汎正の作品を見終って、ほのぼのとした気持ちになって館をあとにした。これぞ本物の仕事といってよい。汎正はこれを機にマラソンコースの折り返し点とみて制作に拍車がかかるだろう。万年青年の画家であれと祈る。バスやタクシーにも乗らず、来た道をそのまま歩いて駅にむかった。画家汎正はこの地に生まれたことに納得がいった。